

[カワセン](https://images-fe.ssl-images-amazon.com/images/S/amazon-avatars-global/default._CR0,0,1024,1024_SX48_.png)

5つ星のうち1.0 和田春樹先生は韓国の良識派研究者たちから学び直すべき

2020年1月10日に日本でレビュー済み

日韓併合に至る過程で、日本政府部内に条約併合か詔勅併合かの微妙なズレがあり、

それが小村、桂などに体现されていたが、寺内の登場で収れんされて行った。それは形の上で、韓国皇帝から願い出たものという「虚偽の物語」を作り出す意図からのものであった、という、別に新味のないお話。

どんなものだって、「今日から振り返れば」不義不当なものである。

ギリシア古典哲学は、当時奴隷制を前提にしていたから価値がない、ということにはならない。

サブタイトルには「条約による併合という欺瞞」とあるが、日韓併合をいくら欺瞞だ、と言っても「不当ではあるが、法的には有効に締結された」

（紹介されている明治大学・海野教授の指摘）事実は動かない。

いまさらのように、併合にまで至る政府内部の政策決定過程を「実証的」に説明されても、要は従来の主張（イデオロギー的思い込み）を繰り返すだけであって、この時期にどうしてこんな代物を出してくるのかさっぱり理解できない。

和田氏や岩波書店は、『反日種族主義』で自国社会への勇気ある告発を行った韓国人研究者たちの爪の垢でも煎じて飲むべきだ。

7人のお客様がこれが役に立ったと考えています